
探偵と科学者 ~ 平次と哀の一日 ~

楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵と科学者〜平次と哀の一日〜

【Nコード】

N5315B

【作者名】

楓

【あらすじ】

静かな夏休みを過ごす哀のもとに、大阪からあの男がやってきた！哀が求める平和な夏休みは守られるのか——サブテーマ：ほのぼのシリアス事件チックなどある一日——平哀もしくは平＋哀です。受け入れられる方に少しでも楽しんで頂けたら嬉しいです。

『一日シリーズ』は一貫して哀嬢至上話（どの話もヒロインは哀嬢です）話によってカプが変更しますが、あらすじに必ず明記それぞれ話は微妙にリンクしますが、単体でも問題ないかと（after話を除く）作品数が増えたら時系列順明記予定 以上

宜しくお願いします（*^ ^*）

FILE・1 平和を撃ち破るモノ（前書き）

哀ちゃんに多大なる愛情を注いでおります。原作カプ以外受け付けない方は申し訳ございませんが回れ右スルーでお願い申しあげます。あり得ない展開に対するご批判もスルー方向で宜しくです。

FILE・1 平和を撃ち破るモノ

それは夏休みのとある一日。

哀は阿笠邸のリビングでふと思いついた論文を脳内で組み立てていた。博士は急な仲間の集まりだとかで外出しており、一人きりの部屋は静かで、夏にしてはほどよい気候の中、考えもスムーズにまとまる。わざわざ地下室にこもらずとも良いだろうと考えていたのだが…

「よっ久しぶりやなちっこい姉ちゃん！邪魔すんで」

何の前触れもなく、長身色黒の青年が乱入してきた。

「工藤がおらんかってこっちなと思たんやけど、おらんのかいな？博士はどないしたんや？」

「……………」

「しかし姉ちゃんオモテの鍵めっちゃ開いてたで物騒やな今日どこにどんな悪モンが潜んでんかわからのやで、カワイイ女のコやねんから一応気イつけなあアカンやろ？」

もはや何から突っ込めばいいのかと呆れ果て溜め息をつきつつ、

「とりあえず姉ちゃんはやめてくれない？」

と絶対零度の視線と声で伝える。

「お…おうスマンつい癖で…」

怯みながらも顎に手をあてて考え…

「なら…哀ちゃん？」

更に気温どころか気圧まで下がる室内。

「じ…冗談！冗談や！…哀？哀サン？灰原サン？？あゝどれもしっ

くりこん！！ええやん哀チャン可愛工し決定や！」

一人で叫んでどっかり隣のソファに腰を下ろす。

「どうでもいいけどせめてチャーム位鳴らしなさいよ……」

疲れた様に立ち上がって、コーヒーの準備をする。ちようど自分が飲みたかっただけ。あくまでもついでだ。組み立て中だった論文もそこから更に何か閃きそうだったが仕方がない。この突然の来客者には早急に丁重にお帰り頂いて、それからゆっくり考えよう。

リビングにコーヒーを持って行き、向かいあわせに腰を下ろす。

「……で、何な訳？博士は急な集まりで出かけたばかりだし、工藤君なら最近ちつとも見かけないわよ？」

また何時もの如く事件じゃあないの？約束してほったらかしなんてザラでしょう彼は？そう話しながらコーヒーを口に運び、一人満足する。今日も良い出来だ。

「いや、特に約束もしてへんのやけどな。とりあえずこつち来たら連絡とれるやる思てたら、どーにも携帯繋がらへんのや。今日は工藤に付き合ってもらいたい場所があつてなあー一人で行くんも別にええんやけど、ついでやし工藤も誘おうかと思つてたんやけど……」
どないしょーとこちらもコーヒーを味わいながら愚痴をこぼす。

「……そう。約束してなかったのなら尚更自業自得ね西の名探偵さんとかくここにはいないから、それを飲んだら帰つてね」

私やることあるから。全く同情の欠片もなく話す哀に、平次は情けない顔になる。見た目小学生相手に毎度やりこめられる。中身を知つてるので屈辱には思わないが、男としてそれはどうなのか……と気弱にはなる。

組織が表向き壊滅した時、あの混乱の中で、その本来の姿を見た。解毒剤試作品で一時元に戻った工藤の傍に寄り添った女性。視線が

交わった瞬間、動けなくなった。炎に彩られた中、爆発による風の吹く中、佇んだ見たことのない女性。爆風にあおられた赤い髪。傷だらけの痛々しい姿。迷いのない視線。だが次の瞬間溢れ落ちた涙。自分はきつと一生忘れない。

その後、手に入れたデータから不眠不休で彼女は解毒剤を完成させた。工藤は元に戻ったが、彼女は戻らなかった。今でもそれがよかったのか、自分にはわからない。確実なのは、何かにつけて、自分が工藤に会う機会が増えたということ。そしてそれが目の前の女性に会う口実になっているということ。

「……じゃあない。じゃあこれ飲んだら行くで、ちょうど可愛カッコしとるし、着替えんでジューブンやし」

「………は？」

「実はバイクできとんねん、メットもあるし、バイクの後ろって乗ったことあるか？」

「………あるけど。じゃなくて」

「なら平気やなゝ安心せえ、事件絡み以外で事故った事ないし、腕には自信あんで！まあタイタニック号に乗ったつもりでどゝんと任せんかい！」

「………駄目じゃないのソレ……じゃなくて」

「よし！洗い物はおいというて！行くで早速！時間は貴重やからなあ

！あ、財布は必要あらへん、どんと甲斐性みせたるで」

「………」

……これは迫力負けになるのかしら認めたくないわね何時もなら絶対断ってるのにそうねきつと気まぐれねたまま今日は暇だったからよでも暇だとしてもありえないわねどうしてくれようかしらそ

れこそ論文から新たな閃きの追求という貴重な時間を潰されたのは間違いなく工藤君の責任よね何のための携帯なのどうせ可愛い幼なじみとのデートか毎度お馴染みの呼び出しに決まってる全く警視庁も何してるの何なのよとばかりをうけるのはこっちなのよこの精神的苦痛から諦念に至るまでの時間と疲労の反比例を400字原稿用紙3枚以内でまとめて夏休みの作文として提出しようかしらあらそれもいいかもね少なくともアインシュタインの一般相対性理論と時間の反實在論なんてテーマよりは小学生らしいかもしれないわ

表情には出さず沸々と考えている間に、平次と哀の乗ったバイクは東都大学キャンパスに到着していた。

「さー到着したで哀ちゃん！念の為離れんように腰縛つとったけど、しがみついとんの疲れたやろ？堪忍な？これ終わったら帰りは美味しいモンよーけ食うて帰ろうなー」

平次はバイクを停めながら哀に笑顔を向ける。

「…どうして東都大？」

東都大学のキャンパスには、昼休みという事もあってか、人が溢れていた。夏休みは小中高と大学は違う。世間は夏休みでもここは別世界だ。

そういえば、平次の今回の上京理由も聞いていなかった様な気がする。

「…高校な、卒業したら東京の大学行こう思てんねん。ここは第一志望っちゅうとこやな」

眩しい太陽の下、平次はキャンパスそして学舎を見上げる。

「今日は、志望大学を見に来たんと、上京後の打ち合わせで来たんや。打ち合わせ言うても、工藤の了解とるだけやけどな。最初は夢の一人暮らしやと思とったんやけど、工藤が元に戻って一人で暮らし始めて、ならあんなでかい工藤ん家に一人位増えてもかまんやろって世話になる予定でな」

ちなみに工藤も東都大第一志望やしな、落ちる気いせんやろ二人とも、と哀の顔を見て自信ありげに笑う。太陽を背に眩しい笑顔：哀は思わず目を逸らす。

「…それで、工藤君とここに来たかった理由はわかったけど、小学生の私が来る理由は？」

「だって姉ちゃん…いや哀ちゃんも、いずれここに通うかもしれんやろ？」

「…何年後の話よ…」

「…今は小学生の姿やけど…どうなるか、まだわからんやろ？」

哀は、はっと平次を見上げた。平次はまた、キャンパスに目を向けていて…その瞳からは何も読み取る事はできなかった。

「さ、行くで！まずは定番の学食からや！」

「ちょ…！」

平次は哀の手を握り、堂々とキャンパスを横切って行く。

見慣れない小学生に注がれる視線。

今日はキャミソール風の白いワンピース。

歩く度に裾がひらひらと揺れる。

平次のバイクに乗るのにも酷く裾が気になった。博士が買ってくれ

たものだが、恥ずかしすぎてとてもじゃあないが皆の前で着られずに、博士には申し訳なかったが貰ったまましまいこんでいたのだ。今日は外出や来客予定がないから着てみて欲しいと博士に泣き付かれて、一日だけならと渋々着ただけだったのに……

学食、講堂、グラウンドをひととおり回り、最後に研究棟を覗く。「学部もなあゝちつと迷つとるんやけど……やっぱり将来の事考えろと法医学か法学系やろうな」

「……探偵になるんでしょう？」

彼と同じ様に貴方も。

「あゝ最初はそう思ってたんやけどなあ……」

もう昼休みは終わり、静かなキャンパス内の静かな研究棟。相変わらず手を繋ぎながら人通りのない廊下を歩く。

（勝手に入っていい場所じゃあないわよね……）

哀は冷静に考えたが、まあ万一咎められても怒られるのは平次だ。どうせここまで来たのだからと、手を引かれるがまま歩く。

「ちつこい頃から身近な大人は警察関係者ばかりやったから……オレも当然、大人になったら刑事になる思ってた……」

平次は真つ直ぐ前を見つめながら話し、哀はうつ向きながら歩く。それぞれ一定のリズムで響く足音。

「でも中坊ン時な——その時期ってアレや、オレらめっちゃ思春期やん。色々考えてもーて。親父ら見てたら、ああいう組織のしがらみとか、色んな制限や圧力とかが、理不尽に思えて嫌で嫌でなあ。親父とは違う『探偵』っちゅう道を歩もう思ってた時もあったんやけどな……」

密やかな声。彼の何時にない声色が、哀の耳元を静かに過ぎる。

「今は正直まだ迷つとる」

「……………」

「工藤がなあ…アイツは真実を真つ直ぐ追い求めるヤツやる？アイツは変わらず『探偵』っちゅー道を選ぶと思うんや」

「…そうね」

「だから今は、アイツとは違う立場で、アイツと同じ目的に向かうんもええかと思つとる」

「…そう」

「…工藤と違って、どっちでも工工言うところみたいで情けないなあ」
「…いいんじゃない？手段はどうあれ目指すところは同じでしょう？貴方も工藤君もそういう人間なんだから——刑事だろうが探偵だろうが、二人は二人よ何もかわらない。寧ろその歳で目標がはっきりしてるなんてそれだけで胸を張れると思うわ。これで貴方が『探偵になるか詐欺師になるか人売りになるか迷ってる』とか言ったなら鼻で笑つて人間ドックに放り込んであげるんだけど。あら、そう思うと残念ね」

「……………哀ちゃん……………」
がつくり肩を落として、情けない声をあげる平次。その時だった。

ガタン！

廊下の先のドアから学生が飛び出してへたり込んだ。続いてもう一人。

哀と平次は顔を見合わせ、駆け出した。

「おい、どないしたんや!？」

「あ…あ……………」

その声はかすれた音にしかならず、二人はただ教室に向けて震える指を示す。

「服部君！」

哀の声に、女学生の視線の先を追う。うす暗い室内に白衣を着た男が倒れていた。

FILE・2 迷走を誘うモノ（前書き）

相変わらず哀ちゃんに多大なる愛情を注いでおります。正統派力
ブ以外は無理という方は申し訳ございませんがスルーお願い致します
（平哀ではありませんが平次と哀しかある意味登場しております
ん）

FILE・2 迷走を誘うモノ

「服部君じゃあないかね！何をしとるんだねこんな所で！」

「よゝお目暮警部ハン！久しぶりやなあ！」

平次の通報で、警察、そして警視庁から目暮警部、佐藤刑事、高木刑事らがやってきた。

「久しぶり……？確か二週間程前にも工藤君と二人で事件現場に居あわせたのではなかったかね……全く君も毛利君と同じ、余程事件に好かれておるとみえる」

警部のジト目と、盛大に吐かれた溜め息混じりの皮肉に、

「アハハ……かなわんな」

と乾いた笑いを漏らす平次。内心（あのオッサンと一緒にたにすんなワレえ！）と青筋をたてているのだが、そこは懸命に抑える。

「あら、哀ちゃんじゃない」

服部君となんて珍しい組み合わせね……と、佐藤刑事が屈んで哀と目をあわせる。

「それで。君たちが来た時はどのような状況だったんだね」

目暮警部の声に、皆一様に平次に注目した。

「ああ、オレらが来たんは、ちょうどあの二人がホトケさん発見して教室から出てきた所や」

目線の先には、教室の隅に震えている学生が二人。高木刑事が近寄り優しい口調で聞く。

「えっと、詳しい話を聞かせるかな？発見した時の状況を……」
二人は顔を見合わせた。そして背の高い方の学生が声を震わせながら言う。

「あの、私達、教授……篠原教授に呼び出されて……約束の時間よ

り少し早かったんですけど、扉の鍵が開いてたから、教授がいると思つて……そうしたら……！」

お互いに手を握りながら、必死に伝える。

「篠原教授つていうのは、この方で間違いない？」

辛いだろつが確認してもらわなければいけない。佐藤刑事が、現場検証の邪魔にならない様に死体の側に近寄る。

「いえ……違います、教授じゃありません最近来られた客員研究員の方です……あまり私たちとは話さないの、良く知らないんですけど……」
背の低い方の学生が涙声で言う。

話によると、この部屋は篠原教授の研究室で、篠原教授は最近、新しい客員研究員の持ち込んだ新薬研究に取り組んでいたという。
『成功したなら生物学上、とてつもない功績を残せる』と研究室内では豪語しつつ、まだ臨床試験段階ではないので表向きは口を閉ざしていたらしい。しかし彼らの共同研究内容は、学部内では公然の噂となっていたという。

「うゝむ……普通に考えると、病死か、研究中の事故か、それとも何らかの怨恨……？高木君、篠原教授の居所は掴めたかね？」

「あ、はい、事務局から名簿を預かつて連絡をとってますが……まだ繋がりません」

高木刑事が携帯を操作しながら返事をする。

「……………妙にキレイな死に顔やと思わんか？」

「……………そうね」

目暮警部達が振り返ると、平次と哀が死体のすぐ側に屈み込み、注意深く調べながら話をしている。

「こ…これ！服部君！」

「転んで打ち処が悪かったつちゅう訳でもなさそうや」

「全くといっていいほど外傷がないものね…」

「勿論血痕もない…心臓かなんかの病気やるか」

「表情に一切の苦痛の跡が見えないのが気になるところだけれど。

まあ無難な見解ね」

見たところそろそろ死後硬直が始まりそうね。そうすると死後2時間程度つて事かいな。そうねこの室温湿度から計算するとそのくらいが妥当なところかしら。

「……………」

やがて突き刺さる様な視線を感じて二人は会話を止めた。揃って顔を上げると、その場にいる警部や警官達全員が二人を凝視している。

「……何をやっとなんだね君達は」

「！？うお警部ハン！？いやその、悪気のーてん！メツチャ無意識！俗にゆー職業病つちゅうヤツや！この姉ちゃんもなんぞ最近ミーハー刑事ドラマにはまっとなるみたいでな『赤シャツ刑事！』『ボス！』って有名なアレや！ホンマ二人してしょーもないわあハハハハハ」

（アカン…思わず昔のコナン相手にしとるんと同じ感覚で話してもうた…！コナンの奴やったらガキの演技の一つや二つ調子こいてやりよつて、この場を上手く誤魔化しよるけど、ちっこい姉ちゃんにはンなコト絶対ムリや！どない誤魔化そ〜）

滝の様に冷や汗を流しながら、平次は必死に弁解する。

目暮警部達の視線の先には、再度死体の傍に屈み込んだ平次と哀がいた。鋭い目をして先程よりじっくりと状態を調べている。

「ついさっきまで病死ととれん事もない状態やった……見てみい、また元の顔色に戻つとる。けどさっきのは絶対見間違ひなんかやあらへん。一瞬やけど、斑点みたいなのが全体に広がって消えよつた。病死でこないな風になるもんかいな？」

「……………そうね、そんな病名に心当たりはないわ」

「——毒か？」

「可能性としては一番でしょうね。ただ、ざっと見た感じで、周りにグラスや飲み物の類はない……」

「せや、流しもキレイなもんや。こりや、半日は水使つてへんわ。

水で飲み込んだんちゃうんやろか？まゝ遅効性の毒うちゅうことも……」

「いえ…それはないと思うわ。逆に即効性で苦痛を感じる暇もなかったんじゃあないかしら…即死とみていいと思うわ。検死だけではなく解剖してみないとわからないけれど…多分、針か何かで傷をつけたんじゃあないかしら？」

「かもしれんなあ……ちょおその刑事ハン、ホトケさんの身体、ひっくり返してよう見てくれはりますか？特にどつかに針かなんかの跡がないか……」

そのやり取りを警部達は半ば呆然としながら聞いていた。

その時、高木刑事の携帯が鳴る。

「は…はい高木………ええっ!？」

「どうした高木君！」

高木刑事は電話越しに何度か頷き、

「直ぐにそちらに向かいます」

と電話を切った後、振り返り言った。

「今、事務局の方に連絡があったらしいんですが…篠原教授が、空き教室で死んでいると……自殺、だと。遺書も発見されたそうです」

FILE・2 迷走を誘うモノ（後書き）

サブテーマの『ほのぼの』は一体何処に…

堅い話ですみません。もしよろしければ感想をお聞かせ下さいませ。

FILE・3 真実を見抜くモノ（前書き）

シリーズ&事件街道まっしぐらです。尚、哀ちゃんに多大なる愛情を注いでおりますので、裏タイトルは『名探偵灰原哀』として読んで頂けたら良いかと思います。

FILE・3 眞実を見抜くモノ

空き教室に駆けつけると、沢山の学生や教授達が集まっていた。ひとまず第一発見者の学生と教授達には残ってもらい、部外者には出て行ってもらう。第一発見者には佐藤刑事が、教授達には高木刑事が話を聞いて回った。

「……………どうやら同じ薬物の様ね。今一瞬、こちらの死体の皮膚も赤紫色に変化したわ。先の死体とのタイムラグはおよそ30分」

「せやな…机の上には薬物のビン、そして遺書…『取り返しのつかない事をしました。死んでお詫びいたします』……………先のホトケさんと同じ薬物を使うとる様やし、普通に考えたら『被害者殺害後、犯人は自殺』つちゆうパターンに見えるんやけどな……………」

「普通に考えなくてもその結論ね。死因の薬物と遺書と動機の三点セットに何か不満でもあるのかしら、西の名探偵さんは？」

「いや…ただ、遺書は誰にでも作れるやろ？これパソコンで入力されとるし」

「そうね、『誰にでも』作れる反面、『誰か』と特定するのは難しいわ。こんな巨大な大学だと、機械数は膨大、使用可能な学生や教授は大多数。きつと特定なんてできないわ」

「どのパソコンで入力したか特定できたとしても、データ根本から消されたらアウトやしなあ……………」

「あら、専門家が本体ごと解析したらどこには残ってるかもね。ただこのケースだと、そんな大掛かりな事態になる前に『自殺の証拠三点セット』が立派な状況証拠になって、自殺で片付けられるのがオチね。他人の指紋が出たりしたなら話は別だけれど」

「……………なんやただの自殺やない気がするんや……………」

こちらの現場にまでついてきて死体に近寄る平次と哀に今度こそ注意しようと思った目暮警部だが、またしても二人のやり取りを啞然と聞きいつてしまうこととなった。

大体、西の名探偵と名高い服部平次ならともかく、どう鼻屑目にみても小学校低学年の可愛い女の子が平然と死体を見て触り、挙げ句我々と同等以上の知識を披露するに至っては、目暮警部は脳内に強固に居座る一般常識と闘わなければならなくなった。

二人を見ながらブツブツ呟く挙動不審な上司の元に佐藤刑事と高木刑事が戻ってくる。

「警部、第一発見者の学生は昼休みが終わってから空き教室の前で、教室開放時間になるまでずっと友人と話をしていたそうです。その間一時間近く、誰も出入りはなかったと。時間になりドアを開けたら、篠原教授はすでにこの状態だった様です」

「ここにいた他の教授達は、生徒の悲鳴を聞いてやってきただけらしいです。篠原教授の人柄は穏やかな人で、普段から特に思い詰めていた様子もなく、もし何かがあるとすれば、やはり新薬研究関係なのでは…との事でした。あとは…先程死体で発見された客員研究員の噂が芳しくなかったという事くらいですね」

「そ…そうかご苦労」

目暮警部が二人に向かって声をかける。やはり新薬研究中に何らかのトラブルから殺害、そして犯人は罪の意識から自殺——…？そう思った時………

「こ…こら！お嬢ちゃん駄目だ！危ない！！」

鑑識の声に目を向けると、哀が机の上にあつた薬物のビンを手にとつていた。小さな手に、何処から出したか白い手袋をはめている。

「あ！哀ちゃん駄目よ！」

「危ない！！」

佐藤刑事と高木刑事が駆け寄るが、哀は躊躇わずキュキュッと蓋を開けた。そしてそのまま薬物の状態をじつと見る。

「まあ待ってえな二人とも」

平次が二人を留めた。

哀は軽くビンを振り、慎重に匂いを嗅ぎ、篠原教授の足元に落ちてあつた注射器を見つけ、

「ふふ」

と唇を上げた。服部を見上げる。その視線はとても小学生の、しかも低学年のものとは思えなかった。

「…服部君、ちょっとお願いがあるんだけど」

FILE・3 真実を見抜くモノ（後書き）

このFILE・3でのポイントは、『ドコからだしたの白い手袋（子供用）』です。うちの哀ちゃんはスーパーガールです。最後まで見捨てず読んで頂けましたら喜びます。

FILE・4 真実を繋ぐモノ（前書き）

FILE・3の続きで、シリアス事件街道が続いております…哀ちゃん&平次独走（警部頑張れ）が許せる方のみ、是非お入り下さい。

FILE・4 真実を繋ぐモノ

「警部、これが4月から5月にかけての出国者と渡航先リストです。東都大学関係者及び篠原教授の関係者は別に抜き出しています」

「ああごくろう高木君……やはりゴールデンウィークの時期だけあって、凄まじい数だな」

「そうですね……しかし、このリストに何の意味があるんでしょうか？」

「それは知らんよ、服部君に聞きたまえ」

二人が揃って目を遣る先には、電話をかけている平次と、隣で椅子にちょこんと腰掛けている哀。うつ向き加減で、床に届かない足をブラブラさせている姿は、数々の言動とは裏腹に妙に愛らしい。

「——しかしあの子は何なのだね」

「はあ……」

「少年探偵団の一人だろう？ 君や佐藤君は詳しいのじゃあないのかね」

「いや……コナン君や他の3人とは良く話すんですが……彼女は目立たなく行動してるって感じなんで……」

高木はいつも捜査に協力（乱入？）してくる少年探偵団を思い出す。あの中で、眼鏡の少年は明らかに別格だった。しかしよくよく思い返してみれば、何時も隣にはこの少女の姿があった気がする。同じモノを持つ者同士の醸し出す雰囲気は確かにあった。彼らには。

「おっしや、スマン助かるわ」

できるだけ早う頼むわ、と平次が電話を切り上げた。

「こっちはバッチシや。あとは連絡待ちやな」
「…そう」

顎に手をあて視線を落としたまま、哀はぽつりと返事をして、じつと考え込んでいる。その微妙な雰囲気、なんとはなしに平次は居心地が悪い。

そんな二人の元に、目暮警部が歩み寄ってくる。

「服部君、これが言われた通りのリストだが…そろそろ教えてくれんかね、一体、何を調べとるんだね」

「あ…っ…」

チラッと平次が哀に視線を送ると、哀は（もう少し待って）とでもいう様に合図を送ってきた。そして目暮警部が平次に差し出したリストを、横から受け取る。

「こ…これ！君…」

「……………」

哀は無言でリストアップされた紙を繰る。凄まじいスピードで文字を追う――

「……………やはりそうね。この薬物を手に入れたのは少なくとも篠原教授じゃあないわ」
と呟いた。

「どういう事なんだね!？」

驚く声をあげた警部を無視する形で、哀はリストのある位置を示す。

「……………この人」

「どれや」

「……………この海外旅行シーズンに、こんな辺鄙な空港を利用した東

都大学関係者は、彼一人みたいね。しかも現地滞在時間半日もないわ。」

「半日？間違いない旅行なんぞやあらへんな……警部ハン、スマンけど至急、調べてもらってエエやるか」

まさかこの女の子が主導なのか！？目暮はますます疑念を抱く。

「…それは構わんのだが…この時期にこの空港を利用している事が、今回の件にどう関係あるんだね」

少し苛立った口調で警部が問いただしてくる。

死因になったと思われる薬物のビンや遺書からは、篠原教授以外の指紋は発見されなかった。まだ正式な結果はでていないが、二人の死因になったと思われる薬物は、このビンの中身で間違いないだろう。

この探偵と少女が、篠原教授が自殺ではないとする理由が、警部達にはわからない。

そんな警部に、平次はいつもの笑みを向ける。自信に満ち溢れた、真っ直ぐな眼差しと共に。

「アカンで警部ハン…謎解きはもうちょい先なんや」

しばらくして平次の携帯が鳴った。

「おっしや待ったで！ハイハイ服部！」

平次がウキウキと相手と話し出す。軽く数言交わして、警部に携帯を差し出す。

「ホイ警部ハンにやと」

「わ…ワシにか？」

訳もわからず電話を替わると懐かしい声が聞こえてきた。

「ハ―イ！目暮警部？FBIのジヨディ・スターリングです、本当に久しぶりですね？」

「スターリング捜査官！？な…何故！？」

FILE・4 真実を繋ぐモノ（後書き）

本当はジョディさんとの会話がスペシャル続く予定でしたが、見事『カット』と相成りました。理由は察して下さいませ。頑張ったんです未熟者で申し訳ございません。

幕間く神の鉄槌（前書き）

注意

こちらは、FILE・4にて目暮警部が電話中の時の平次&哀ちゃん
の会話です。『会話のみ』です。この世界の下地の様な感じです。
でも読まなくてもお話は続きますので、了承頂けました方のみお入
り下さいませ。

幕間―神の鉄槌

『この薬物——哀チャンの言うた通りのモンやったとしたら……
… あん時、組織は完全には消し去れへんかったつちゅう事かいな』

『… 貴方、あの組織に関わっていた者が、全世界にどれだけいると思ってるの。中には組織の存在も知らずに日常関わってきた人達もいる。組織がこの世から完全に消える日なんて——それだけの人数が一斉に死んでごらんない？人口の数パーセントが確実に減るわ。そうなれば、組織を壊滅した時の騒ぎの比じゃあないわね』

『……じゃあ！何やったんやアレは！三ヶ月前、オレらが！工藤が哀チャンが！みんなが命がけで潰したモンはなんやったんや！？』

『……私達が、組織の中枢部や手足を壊滅させたのは確かよ……そうでないと、今頃工藤君も大手を振って生活できていないわ……それは安心していいと思ってる。残っているのは一人では何もできない組織の末端や、何も知らない人達や、下手に動いて今の組織に関わりたくない各国の重鎮達でしょう。彼らは富と名声を守るのに必死だから、自分達以外に関わっている場合ではないのよ』

『……何も知らんと生活しとったヤツらならともかく、その薄汚い連中だけでも、どないかこないかしよりたいなあホンマ』

『… 心配しなくてもいずれ神からの鉄槌が下るわ。——私の様にね』

『……なあ、いつぺん聞こ思ったんやけど……組織は機能してへんって言うんなら、なんで元の姿に戻らんのや……？』

『――罰、かしら』

『…さっき言った“神サンからの鉄槌”っちゅーヤツかいな！？そもそも毒なんて作ったつもりあらへんかったって工藤には言っただんやろ！？一度犯してもうた罪は、償う事もできへんっちゅーんか！？んなモン、“神サンからの鉄槌”っちゅーモンは、誰が決めたモンでもあらへんやろ！キツチリ罪償って、自分が思う様に生きたらあかんのかい！幸せになる思たらあかんっちゅーんかい！』

『……そうよ……誰でもない、私が、私に与えた、これは罰なの』

『……哀チャンは――あの志保っちゅう姉ちゃんは、死ななあかん、罪人なんかや、あらへん……』

『……ありがとう……』

(いじめんなさい……)

幕間く神の鉄槌（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

FILE・5 唯一を知るモノ 哀（前書き）

少し長くなってしまったので、哀ちゃん追及バージョンと平次追及バージョンに分けました。前編・後編みたいな感じかと。

今回はますます警視庁の方々の出番がございません…。よろしければおすすみ下さい！

FILE・5 唯一を知るモノ 哀

篠原教授が発見された教室は、今や閑散としていた。警察の現場検証も終わり、死体は今頃司法解剖へと回されていることだろう。その夕日に照らされた教室に、一人の教授が呼び出された。

「あの…佐伯です、…刑事さん？」

恐る恐る扉を開けたのは、ひよろりとした体型のいかにも研究肌の男性。縁無し眼鏡が光に照らされ、その表情を一瞬だが隠した。

「ああ、お忙しいところ申し訳ない。警視庁の警部、目暮です。お時間はとらせませんので、どうぞそこに」

「すみません昼から学長と打ち合わせに入っております、今ようやく終わっただけです。で、お話とは？」

佐伯は目暮警部に指し示された席に座る。

「いえ、事務局の方に聞きましたら、佐伯教授が篠原教授と一番長いお付き合いだと伺いましてな。少しお話を…」

「……聞きましたよ、彼、亡くなったそうですね？私とは、親しいというより『腐れ縁』というやつで…研究仲間であり、ライバルで

した」

佐伯は目を伏せ、少し翳りのある表情を見せた。同僚を失った悲しみ――それを感じさせる。

「最近何か変わった様子はありませんでしたかな？」

「特には……お互い忙しくて、ほとんど話す機会はなかったんです」

「そうですね……いや、よくよく周囲から話を聞いたのですが、研究はすこぶる順調で、彼らには争う理由が見当たらないんですね。何かご存知ならと思ったのですが……」

はあ……と溜め息を吐きながら呟いた目暮に同情の視線を向けた佐伯は、チラリと時計に目をやり、申し訳なさそうに言った。

「……あの、今回こんな事になって、学長の方から早急に東都大のイメージを回復する様な研究成果を求められていて……今は一分一秒でも時間が惜しいんです。すみませんが――」

「それで、篠原教授に替わって、あなたが新薬研究を引き継ぐ事になったんですね？」

席を立ちかけた佐伯を手で押し留め、目暮は言う。視線は先程までとは違い、彼の表情を鋭く捉えていた。

「――ええ。確かに新薬研究は私が引き継ぐ事になりましたが、それはつい先程学長に言われて、渋々引き受けたんです」

「あなたは、学部内で篠原教授と並ぶ、いや、篠原教授以上の経歴の持ち主らしいですね。同僚としての付き合いも長い。……ちょうどあなたは長年の研究に一区切りついて、今は特に新しい研究を始

めることもなく、時間は余っていた様ですな。篠原教授が亡くなったら、この画期的な新薬研究とやらを引き継げるのは、実力的にも時間的にも、あなたの研究室しかありませんなあ」

目暮の何かを含んだ様な口ぶりに、佐伯の表情が少し険しくなる。

「……………何がおっしゃりたいんですか？妙な言い方をしないで頂きたい」

「……………ときに佐伯教授。貴方は、三ヶ月程前アメリカに旅行に行かれたとか。何の目的で行かれたのか差し支えなければ教えて頂きたい」

いきなりの話題転換だが、目暮の険しい表情は変わらない。少なくとも『バカンスで』という答えは期待していない様子だ。

「……………今度はプライベートな質問ですか。先程警部さんがおっしゃられた様に、私の長年の研究に一区切りついたものでね。旅行に行つて来たんですよ。自分へのプレゼントってやつですな」

「観光旅行という訳ですか？」

「そうですね」

「……………そうですね、観光旅行。それは結構」

「……………一体なんなのですか、申し訳ないが付き合つてられない。忙しいので失礼させていただきます」

佐伯が荒々しく席を立つ。焦った表情で目暮警部が平次を見た。

平次は隣の哀を見る。

佐伯は足を止めた。振り返った先には——教室に差し込む眩しい西日の中、腕を組み、目を細めて微笑む一人の少女。

「……………何の単語かなそれは。生憎日本語以外はさっぱりなんでね」
「聞いた事ないかしら？」
「ええ」
「じゃあ、ドクタークラウゼ、という名前に心当たりは？」
「……………何なんだね君は」

それには答えず、哀は、更に目を細め、口角を上げて笑った。

「この薬物——毒と言った方がいいかしら。ちょっと特殊だね。日本国内では手に入らないわ。勿論輸入もアウト。……調べてみたら篠原教授はここ一年、国外には出てないわ。彼に入手は不可能ね」
「へえ、お嬢さんは物知りなんだねえ。それが篠原君が使った薬物の名前なのかい？……しかし日本国内で手に入らないからといって、たまたま旅行に行っただけの私を疑うのかい？海外旅行に行く日本人の数を知ってるかいお嬢さん？」

「勿論知ってるわ。年度によろけれど1700万人前後って所かしら。」

「へえ本当に物知りなお嬢さんだ。海外に行った人がその毒を手に入れたと考えているのなら、是非その年間1700万人全てを捜査対象にしてほしいね」

失礼するよ、と踵をかえす。哀は静かに言った。

「この毒。アメリカのとある僻地の研究所でしか手に入らないの。しかも非合法。昔から裏で暗躍するだけで、表に出回った事が一度もないから、普通の人は存在すら知らない」

目暮警部も佐藤刑事も高木刑事も、哀が何を言っているのか解らない。いや、脳が理解を拒否するといった方が正しいだろうか。

その中で一人、平次だけは佐伯の表情から目を離さない。

「この毒は、本当に自然死に見せかけられる。体内を調べても何の痕跡も残さない。完璧な犯罪。一瞬にして起こる安らかな穏やかな死。『marple053』はそれからもじった陰語なんだけれどね。昔から主に暗殺に使われていたわ」

（あんさつ…）

高木刑事が無意識に呟いた。

「『marple053』にはね、研究者仲間には知られていない特徴があるの。一つは、死後硬直が始まる一瞬、体表に赤紫の斑点が全身に広がり、消える。この時点で、使われた毒の種

類は『marple053』でしかありえない」

哀は組んでいた腕をほどき、人差し指を口元に添える。

「……もう一つは、素人には判らない独特の香り。『marple053』は精製から時間が経つ毎に香りが変化し続ける。それが解れば、精製されてからの時間の経過が判別可能なの。そして四ヶ月前後で毒性が失われ無毒になり、使用されずに残った『marple053』は世間に晒される事もなく無事地上から消滅。こんな毒世界中探しても一つだけ。日本の医師や法医学教室じゃ何も解らないわ。普通なら完全犯罪ね」

平次が小さく笑った。確かに『普通』ならば……この場に哀がいなかったならば、彼の完全犯罪は間違いなく成立していただろう。哀がいたからこそ、これは自然死ではない、容疑者が複数存在するという事もない、彼一人に限定——いや、断定されてしまった。

「ところで、置いてあった残りの毒の香りから判断すると、精製してから三ヶ月つてところね。ちょうどゴールデンウィーク前の旅行シーズンに、あの辺鄙な空港を利用したのは、貴方だけ——残念ながら貴方にしか、この毒は手に入れないの」

「…………馬鹿馬鹿しい。今の話は、みんなお嬢さんの空想話だな。そんな証拠がどこにある。なんなら、あのビンの中身を調べてみるんだな」

佐伯が嘲笑うかの様に言い放つ。哀は片眉を器用に上げ、薄く笑った。

「あら無駄よ。言ったでしょ？世の中に出回った事がないって。サンプルやデータを持っている国なんて一つもないわ」

「ますます話にならないね——警部さん、幻滅しましたよ、日本警察はこんな幼稚園児の言う事を鵜呑みにするどころか尋問の真似事の機会まで与えてるんですか馬鹿馬鹿しい！」

「あ…いや…」

目に見えてうるたえる目暮警部に、なおも佐伯は詰め寄る。

哀は『誰が幼稚園児？』と組織も真つ青な程のブリザードを纏いはじめた。平次は冷や汗を流しつつも『まーまー』と必死になだめ、目暮に未だ激しい態度で迫る佐伯に目を遣った。

FILE・5 唯一を知るモノ 哀（後書き）

薬物名：『APT X 4 8 6 9』を知る人物には、「あ、組織の薬だな」と判る名前にしました。簡単ですみません（^^；でも判つて下さったら嬉しいです！

FILE・6 唯一を突きつけるモノ 平次（前書き）

FILE・5の後編みたいな感じです！

哀ちゃんよりも平次が活躍しまくっているバージョンは初では…??
平次かなり男前（私的には！）なので、よろしければ、おすすみ下さい。

FILE・6 唯一を突きつけるモノ 平次

「佐伯ハン」

平次は佐伯に向かって初めて口を開き、一見愛想良く笑いかけた。

「ほな聞くけどなあ。たった半日で観光もクソもあらへんやろ。あの空港にホンマは何の用事で降りたんや？」

「……プライベートなんでね。黙秘するよ」

「——人に会ったんちゃうんか？ドクタークラウゼっちゅーヤツと」

「……全く聞いた事もないね」

「そいつと会って『marple053』っちゅー毒、貰ったんちゃうんか」

佐伯はついにカッとなって叫んだ。

「いい加減にしろ！そんな名は知らんと言ってるだろっ！もういいだろう！篠原君は自殺なんだよ！篠原君が自分で毒を手に入れ！よそ者の研究員を殺し！自分自身でその毒を打って罪を償った！他に何があるんだ！！私を疑うなら証拠をだせ！！」

バンッ！！

佐伯が机に拳を振り落とした。静まりかえった室内に、荒い息遣いが繰り返される。苛々した様子で頭に手をやり、罵倒の言葉を洩らす。

平次は落ち着いた視線で彼の一挙一動を追いながら、佐伯に近づいた。

「……………佐伯ハン、アンタ、学長との打ち合わせの後、そのままこっち来たんやっとな」

「それがなんだ!!」

「アンタ、何で篠原教授が自殺って知つとるんや」

「……………それはもちろん、学長との打ち合わせ中に、その連絡が入ったに決まってる。そのままそこで、学長から新薬研究の引き継ぎを依頼されたからね!」

「……………さやか」

一瞬目を伏せた平次が、次の瞬間、独特の笑みを浮かべて佐伯を睨みつけた。

「佐伯ハン、何でアンタ、篠原教授が、毒を『打った』なんて分かるのや」

「……………え」

「学長んトコには『客員研究員と篠原教授が死んだ、篠原教授は自殺らしい』言っただけや。毒やら何やらって言葉は伝わっとらんで」
「……いや…違った、思い出した、そういえばここに来る途中、目撃した学生達とすれ違って聞いたんだった」

「ほお…そらまたおかしな話やなあ…アンタ、現場おらんかったから知らんのやろうけどな」

「……………何がだね」

平次が面白そうに笑う。獲物を前に爪を研ぐ獣類の様に、平次の持つ雰囲気があります研ぎ澄まされていく。

「あん時の目撃者は全員、『篠原教授は毒を飲んで死んだ』ゆーて思うつる」

「……………まさか」

「ホンマや。素直に注射器机の上置いといたら良かったんや。なんや下手に小細工して『毒を打った後、手元から注射器滑り落ちた』状況つくったんやろうけどな、皆、机の上の遺書と毒の入れモンに目がいってもうて、足元に隠れた注射器なんぞ誰一人気付かんかったわ。何なら目撃者全員に確認してもええで」

「……………」

「まあそれも当然やな。人が倒れとつて、近くに毒らしき入れモンがあつたら『飲んだ』思うんが普通や」

「……………」

「——つまり発見時、現場見とらんにも関わらず、注射器の存在を知つとる佐伯ハン——あんたが犯人っちゅうコトや」

佐伯が、苦々しい顔で平次を睨みつける。

「…………… たまたま、言い間違えただけで犯人にされてしまうとはな。全く呆れるよ。記憶違いという事もあるだろう！」

「もう一つ。さっきアンタ、『あのビンの中身』とか言うつつたけどな。こんな具体的な情報も流れとらん。『毒を飲んだ』言う噂だけや。これも注射器と一緒に、現場見とらへんあんたが、『毒がビンの中に入つつた』ってなんで知つとるんか、よう聞かせてくれへんか」

「……………」

その時、平次の携帯が鳴った。

「…………… 警部ハン」

平次は佐伯を睨みつけたまま、携帯ディスプレイを見もせず目暮警部に渡した。目暮は頷いて、そのまま電話に出る。

「…………… なあ、佐伯ハン。アンタが学長んトコに行つたんは1時前や。オレらが一人目発見したんが昼休み終わった2時頃。死亡推定時刻は、一人目が12時頃、二人目が12時30分頃や。アンタには、はつきりとしたアリバイもないんや」

「…………証拠…何も証拠がない！私が、私が犯人だという証拠は
いはずだ…………！」

目暮が電話を終えて、戻ってくる。佐伯を見据えて静かに言った。

「佐伯教授。残念でしたな、証拠と証人が見付かりました。たった
今、FBIから、あなたに薬物を流したドクタークラウゼの身柄を
拘束したと連絡が入りましてな」

「え……………」

「あなたが空港に降りて彼を訪ねた数日後、研究所は謎の爆発で焼
失したそうだな。ドクタークラウゼは行方不明になり、FBIが追
っていたそうだ。——今日、ある人の情報から、FBIが彼の隠

れ家を特定できたと連絡がきましてね。全てはFBIの突入待ちだ
ったんだが、隠れ家にあったパソコンなどの証拠物件も全て押収で
き、過去に『marple053』を流した相手のリストもフロッ
ピーも発見されたと。彼の供述から、佐伯教授、あなたに『mar
ple053』を流したというはつきりとした事実も判りましたよ」

「————」

「彼からあなたに伝言だそうだ。『我々は死神に影を踏まれた』——

——意味が解るかね」

佐伯は『死神…』と小さくつぶやき、視線をさ迷わせ、そして乾
いた笑いと共に崩れ落ちた。

FILE・6 唯一を突きつけるモノ 平次（後書き）

いつぞやのあとがきで、ジヨディ様（！？）のセリフがめでたくカ
ット…と書きましたが……カットされた内容を取り戻すのがとんで
もなく大変でした……恐るべしジヨディの罠…

FILE・7 それぞれに明かされたモノ（前書き）

またしても長くなってしまいましたので、前編後編みたいに分けました！

今回はますます警視庁の方々&平次の出番までもが少なくて申し訳なく…少し重い話ですが、読んでいただけましたら嬉しいです！

FILE・フゝそれぞれに明かされたモノ

二人が空き教室のあった学舎から外に出ると、既に辺りは宵の気配に包まれようとしていた。

平次は、一度両腕を上げ『うゝん』と身体を伸ばす。暗い空を溜め息と共に見上げて、首と両肩を音をたててほぐした。

「……………今夜はきっと、月が綺麗やで」

「……………」

哀はうつ向いたまま、何も言う事はなかった。

（私は恐かったんです）

逮捕状が出るまでの間、佐伯はぼつりぼつりと話し始めた。

（本当に恐かった。私の長年の研究テーマは……今の私にはあれ以上の発展や転換は望めなかった。研究結果には満足している。ただ、これから先……次に取り組むべき研究構想が私には何もなかった。そんな時、篠原君の新しい研究の噂を聞いた。客員研究員が発案者らしいが、そんな事は関係ない。その研究は篠原君の成果となるだろう。しかも伝え聞いた研究内容……興味と恐怖で身震いしたよ。もし成功したら彼は一躍この世界のトップだ。私には耐えられなかった）

薄暗い室内には、哀と平次、それに警部他警視庁の刑事達。その誰に聞かせるという訳でもなく、佐伯は一点を見つめたまま語る。

（だから四ヶ月前、私は篠原君の研究室に行った。最初は私の研究チームも合同で研究をさせて貰おうと思った。やはり私も生涯研究者。探究心には逆らえない。それ程に魅力的だった。だがそこには客員研究員の男もいて……私の話を聞いた後、薄ら笑いを浮かべて私を否定したんだ！！篠原君にでもない！只の客員研究員に！！『あなたの研究論文は読みました、凄く堅実な研究をされますね、しかし大胆な発想はない。篠原教授にはそれがある。だから私は篠原教授の方に話を持って行ったんですよ』と！

篠原君は何も言わなかったが、何も言わないという事は奴と同じ考えだという事だ。私のプライドはズタズタになった。目の前が怒りで真っ赤になり、震えが止まらなかった……！！）

その時の感情を思い出したのか、固く目を瞑り、拳を握り締める。自分を落ち着かせる様に大きく息を吐き出すと、再度話し始めた。

（……私は以前からネットの非合法研究系サイトを見ていた。多国籍入り交じる中、掲示板でのやり取りからその一人とチャットを交わす様になり、私はこの思いを打ち明けた。殺したいくらい憎いと。彼は理解してくれた。これは研究者にしかわからない…研究者にならわかる気持ちだ！私は彼に無性に会いたくなり、アメリカに渡り…別に毒を貰いに行つた訳ではなかった。ただ話を聞いて欲しかった。待ち合わせた空港内の喫茶店で、彼は鞆から小さなビンを出した。一瞬頭の中が真っ白になる中、彼の声だけは妙に記憶に刻み込まれた。『無味無臭』『自然死』『一瞬で安らかな』……………帰国してからずっと私は懷にビンを持ち、迷い考えていた。本気で殺そうなんて考えていなかった。このままでいいじゃないかと。私は私の新たな研究を探そうと）

佐伯は己の手の平をじつと見つめた——長年の研究でじっくり馴染んだ手袋に覆われた手を。

（今日はそれを伝えるに篠原君の研究室に行つたんだ。そこには客員研究員の男しかいなかった。篠原君の行き先を尋ねた私に向かつて奴は……奴は！！『篠原教授を口説こうとしても無駄ですよ。彼も、あなたの所の研究員も、あなたはもう駄目だと思ってますから』と……耐えられなかった。懷に入れてあつた毒を取り出し、研究室にあつた注射器に入れ…あとは一瞬だった。奴は私と

目もあわず背を向けて話していたから……簡単だったよ。簡単すぎて笑えたくらいだ。私は研究上普段から手袋をしていたから何も心配はいらなかった。急いで遺書を作成して、データを消した。そして彼を捜した。篠原君とは長年の付き合いだから居場所は直ぐに分かった。彼は昼休みは人気のない空き教室にいる。昔の様に笑いかけ、昔の様に隣に座って、昔の様に彼の肩に手をやり……それで終わった。本当にそれで何もかも。一瞬で………)

目暮警部が、佐伯に声をかける。手には手錠がかけられ、促され立ち上がる。

警部や佐藤刑事や高木刑事はずっと、二人に何か言いたげな視線を送ってきていたが、哀は無言でうつ向いていたし、平次も何も言わなかった。

歩き出した佐伯は、何か思い立ったのか、哀の前で立ち止まった。

『聞いていいかな』

『……………』

『君は、私が犯人だと確信していたね』

『……………ええ』

『どうしてだい?』

哀は顔を上げて佐伯を見た。その顔はいつもと変わらない、いつ

も通りの感情の籠らない表情をしている。

『……通常、犯罪が起こった場合、動機・アリバイ・殺害方法・現場状況……あらゆる面から容疑者——犯人を絞り込む』

『……』

『でも私は、この薬を使ったのが、貴方以外にありえないと知っていた。犯人を最初から知っていたの。だから、貴方の嘘を突き崩すだけで良かった』

『それはあの空港を利用した——ただそれだけの事かい？』

『……ええ。何故なら彼に会うには、その手段しかないから』

『——あの空港はなんなんだい。いやに嚴重でね。正直観光しようにも、空港の外にも出られなかったんだ』

佐伯のさぞ困ったかの様な声に、哀はクスリと笑った。

『でしょうね……あれは、あの研究所の為だけに、アメリカの政治家を買収して建設された小さな空港。四方を険しい山や切りたつた崖に囲まれて、陸路は山越えすら無理。その自然の檻の中には研究所しかない。勿論観光施設なんて有る訳ないの』

『……君は、私が薬を入手して、篠原君に渡し、それで篠原君が罪を犯した——とも考えなかったのかい』

『ええ、あり得ないわ』

『……何故』

『ドクタークラウゼ——彼は変わっていてね。毒には独自の哲学があるの。体内には痕跡を一切残さず、芸術的な死を。毒自体には自分の手を離れても、何時自分が精製したか判る様に自分にしか判らない香りをつけ、しかもある一定期間以上保管されない様に、数ヶ月で無毒に——行き過ぎた美意識とでも言うのかしら』

彼の姿や表情を思い出したのか、佐伯が苦笑した。

『そして、何よりも彼は、自分の精製した毒を使う人を選ぶの。自分の目で見て、その殺意に共感できる人をね。昔はそんなこだわりは無かったんだけれど……今は彼の毒を手にできた人達は、皆、間違いなく自らが殺人者ね——そんな彼を扱い損ねて、でも彼の才能は手放せなくて、彼はあの僻地の研究所に軟禁された様なものよ』

哀は目を伏せ、寂しげに笑う。

『……彼とは、知り合いなのかい？』

『……貴方達と同じ 腐れ縁 よ、きつと』

佐伯は小さく笑い、肩をすくめて歩き出す。

その背に哀はつぶやく。

『——自殺や殺人に見せかけずにあの毒を飲ませていたら、貴方、完全犯罪だったわ』

『……体内に何も残っていなくても、お嬢さんに出会った時点で罪は暴かれたよきつと』

佐伯は、顔だけ振り向き、言った。

『……そういえば別れ際に彼が言っていたよ。近々ここを離れる事になるかもしれない、シルバードレッド達が動き出し、もう私と連絡はとれないだろう。私の隠れ家を知る者は、今は生きているか死んでいるか分からないが、待ってみるとね。その時は意味が理解できず気にも留めていなかったがね』

『……………』

彼は、初めて、柔らかく微笑んだ。

『少し、わかった気がする。彼は、君の事を心配していたよ——
さようなら、我々の可愛い小さな死神さん』

……………佐伯の言葉が静かに響いて消えた。

彼はもう振り返らなかった——

FILE 7 それぞれに明かされたモノ（後書き）

裏設定

クラウゼ博士は『死んでいるかもしれない神がかった女』という意味で『死神』って使ってたんです。ちなみに哀ちゃんのお母さんをずっと好きでした。

FINAL 平次と哀の一日（前書き）

初めての投稿で、思ったよりも長くなってしまいました。サブテーマ『ほのぼのシリアス事件チックな一日』にちゃんと沿えてましたら嬉しいのですが…

読んで下さる方々に感謝しつつ…

ありがとうございました！

FINAL 平次と哀の一日

「なんや散々な一日やったなあ。もう日い暮れとるし、昼メシは食いそびれるし……トビキリ美味いメシでも食わんとやっとなんと思わん？ ホンマにもう限界やねんけど」

なあそう思わん？と平次は話しかけるが、哀は無言で何の反応も返さない。

平次は後ろをうつ向きがちに歩く哀に、肩越しに視線を遣る。しばらく躊躇った後、気まづげに話しかけた。

「……………ドクタークラウゼっちゅーヤツの隠れ家、教えたの後悔しとるんか？」

「……………してないわ」

する訳がない。だって彼も私と同じ、心のどこかで、解放され裁かれたがっていた。

「ソイツと仲良かったんか？」

「……………貴方それ新手の面白くない冗談？あの組織にそんな関係があったら驚きね。——彼は、両親の昔からの知り合いらしいわ。あの研究所に軟禁される前は組織の中枢にいた人だから。両親の死んだ後、研究を継いだ私の噂を聞いて会いに来てね。その時に彼の開発した毒は全て見せてもらっていたの。何かあった時の為に隠れ家も教えてくれた……………そうね、そう考えたら、両親のかわりに気にかけて貰っていたのかしらね」

遠く在った日々を思い出したのか——哀は一瞬胸をつく様な表情をした。

「……………そんなんやったらなんで、黙つとかんかったんや？確かにそのドクターの供述があつたから佐伯も自白したんやろうけど……………」

「彼も私も。組織の外では長く生きていけないから……………だから、彼はきつと待っていたのよ。私という彼を理解できる存在か、裁きを受ける日を。だからこれで間違つてなんかないわ」

「……………」

「それよりも、今回は彼の創った毒だったから何もかも分かったけれど、きつとこれからも色々な組織の負の遺産が世間に表れる可能性はあるわね……………」

「……………ま、その時はその時やろ。あ……………しかしなんや、あのオッサンも幼稚園児やら死神やら大概失礼なヤツやったなあ」

こゝんなに可愛くて美人さんやのにと、平次は哀の前で腰を屈めて、顔を覗き込んで笑う。話を無理矢理替えようとする平次に、哀は何故か苛立ちを感じた。

「——別に。裏切り者にはふさわしい似合いの言葉だと思うけれど」

平次と目を合わさず、ずっと彼を避けて追い越し歩いて行く。振り返らず真っ直ぐに。

——そう、死神憑きの女にはぴったりの言葉——このぬるま湯に心の底まで浸りきらない内に、彼のように裁かれ、何処か違う場所へ行きたい——

心が凍てついていくのが判る。ない交ぜになった様々な感情が、自分自身を内から滅茶苦茶にしていく。

「——まあでも」

「きゃあ！」

平次が哀に無言で追いつき、突然後ろから抱き上げた。一気に高くなる視線に目が眩む。

「ちよっと！降ろしなさいよ！服部君！？」

「やつぱ、いくらなんでも幼稚園児はしつづれーや！今日はこんなめかし込んでカワエエのになあ！」

あのオッサン頭だけじゃのうて目えも悪かったんちゃうか？と、哀の頭を撫でながら歩く。哀は苛立ちを露にして必死に抵抗する。

「止めてったら！貴方も大概子供扱いしないで！！」
「ちやうで」

平次は哀の身体の向きを変えた。自分と向かい合う形にして、同じ目線の高さで見つめる。

「姉ちゃんは、哀チャンは、最高の大人の女や」

何も言えない哀を、キュッと抱きしめる。よしよしと、背を数回軽く叩く。

「……………言ってる事とやってる事が違うんだけど」

「そおか？まあ今日は最高の女にも甘えてほしい日なんや」

「……………私の方が年上よ」

「悔しかったら元に戻ってみい」

再度、平次は右手でよしよしと背を叩く。本当は同じ年代の男女にもかかわらず、哀の小さな身体は平次の左手に座る様に抱えあげられ、その不安定さから自然と平次の首元にしがみつく形になる。

「……………貴方、本当は凄く馬鹿でしょ」

「アホ、大阪人にバカ言うたらアカン」

「……………やっぱり馬鹿」

「……………なんでもエエわ。とりあえず落ちん様に首にしっかりとしがみついたとき」

「……………嫌よ出来る訳ないでしょ。そもそもなんで抱き上げられるの心底不本意なんだけど。貴方本当に馬鹿よね」

「っだ……………！アカンやっぱ馬鹿馬鹿言っくな！！」

（ホント、馬鹿なんだけど……………）

平次の肩にそつと頭を寄せてみる

（しがみつくなんて、できないんだけど）

何かをふっきる様に、固く目を瞑る
不思議と苛立ちが薄くなっていく

（……………しばらくは、このままで、いいのかもしれない）

白いワンピースが宵闇の中、フワリと揺れた。

「…ねえ」

「…なんや？」

しばらくして平次は哀をゆつくりと降ろし、再びキャンパスの中を手を引いて歩き始めた。

「貴方は私の言うことに不安は感じなかったの？」

見ただけで、匂いを嗅いただけで断定して。被害者の皮膚の変化はあったけれど。良く考えたら血液検査も解剖結果も待たずに信じるなんて普通あり得ないわよ？

そう聞いた哀に、『理由なんてあらへん』と、真っ直ぐな彼らしい顔で平次は笑った。

「だってなんや、哀チャン以上の科学者なんて、あらへんのやろ？」

その顔は、眩しいくらいの自信に満ち溢れていた。

「あゝもうアカン腹減ったゝ！哀ちゃん何でも食べやゝとりあえず生ゝゝは不味いなウーロンワンでゝ」

「…私もウーロン茶」

「スンマセンお姉ちゃんウーロンツいでとりあえずよろしゅゝ」

もう何処でもいいから取り敢えず食事をと、平次と哀は目についた小綺麗な居酒屋に入った。出来合いの物ではない洒落たお通しに、二人は内心『当たりだ』と思いながら額を付き合わせメニューを見る。哀も何時もなら『何でもいいわ』と言うところだが、流石に空腹だ。

適当に数品注文して、グラスを持つ。

「んじゃ、まー乾杯や」

「何に乾杯するのよ」

必要ないわ、と眉をしかめた哀に向かって、そんな事言わんとゝと平次が泣きつく。

大体、今日はゆつくりのんびり論文を構成するはずだったのだ。それが突然の不法侵入に拉致おまけに殺人事件に巻き込まれ昼ごはんは食べそびれ幼稚園児と間違えられ気付けば太陽は西の空の下。拳句赤子の様に抱きかかえられ慰められ。

改めて一日の出来事を思い返してみると、今まで堪えてきた気分が急降下していくのを感じる。

「せつかくの哀ちゃんとの初デート記念やねんから何かエエ名目を…」

「飲むわよ」

「ちよちよつと待ち！ストップ！いや初デート記念も捨てがたいけどやっぱし初2ケツ記念…」

「飲むわ」

「だあゝっっ！！せや！！名探偵と美人科学者コンビの初事件解決記念でどやっ！？」

わくわくした瞳で見つめてくる平次に向かって、これみよがしな溜め息を吐く。

「…服部君」

「何や??」

その時の哀のつくった笑顔は壮絶に恐ろしく、眩しい程に綺麗で凍てつく程にわざとらしかった。

「貴方達の事件体質に金輪際私を巻き込まないで頂戴ね？」

阿笠邸に戻る頃には、既に夜8時を過ぎていた。とりあえずバイクは工藤邸の前に停め、一緒に博士の元に向かう。

よくよく考えると、博士の晩御飯の準備も何もかもしていなかったのだ。コーヒークップはシンクに置きっぱなし、読みかけの雑誌もリビングに放りっぱなし、洗濯もまだとあつては、家事のスペシヤリストの名折れだ。

哀はブツブツ文句を言いながら先を歩く。途中スーパーで買い物をしてきた荷物は勿論平次が抱えている。

門をくぐると、玄関の向こうから博士の泣き喚く声が聞こえてきた。何事かと、思わず哀と平次は顔を見合わせ玄関に走り寄る。

「聞いたるんか新一君！？哀君がおらのじゃ！書き置きも何も見当たらないじゃ！哀君はほとんど外出しない娘なのは新一君も知っとるじゃろ！哀君は哀君は……新一君は哀君が心配じゃあないのかね！？何？今事件で長野！？長野がなんじゃワシの哀君の一大事じゃ！新一君帰ってこれんのか今すぐ帰って来てくれ新一君……！！！！！！」

——ドタンガタンドガシャンと何かの破壊音まで聞こえてくる。

「……………どうしてくれるのアレ」

「……………スマン……………なんかもオレが悪かった……………」

玄関を見上げたまま呆然と呟く哀と、がつくりと肩を落とす平次。
二人は博士の電話が終わるまで、ひたすらひたすら東京の夜空を
見上げていた。

FINAL 平次と哀の一日（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！

この時点で全然他人に甘えられない哀ちゃんが、『東都大学』…
の方では多少無意識にですが甘えられる様になっております（↑ホ
ントに多少なんですがね（^^;）

年月毎にアップできたら、そんな心情の変化も判りやすいとは思
うのですが…

これから、このシリーズでそんな変化を書いていきたいです！

ちなみにこちらにもちよつとしたオマケをアップ予定（新一登場予
定↑またかよ）です！

是非また読んで感想いただけたら嬉しいです！

本当に本当にありがとうございましたー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5315b/>

探偵と科学者～平次と哀の一日～

2010年10月9日05時58分発行